

杉の子

奥多摩町立氷川小学校
学校便り 1月号
令和5年 1月 10日発行

「リバウンドメンタリティ」

校長 松井 良



6年生は道徳の時間に、「くじけず努力し続ける力」について考えました。「iPS細胞の向こうに」という教材は、2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥さんの物語です。学生時代柔道やラグビーに打ち込み何度も骨折した経験から、整形外科医を目指していた山中さんでしたが、研修や訓練に取り組む中で、他の医師が20分で終わる処置に2時間も掛かってしまうなど、うまくいかないことがたくさんありました。「自分は医師に向いていないのではないか」と悩んだり、名医でも治すことのできない重い病気に苦しむ人の姿を見たりする中で、自分の医師としての能力の限界と現在の医療の限界を感じていました。そこで、「今治すことのできない病気を根本的に治すための研究をしていこう」と、研究に没頭していくこととなります。物語にはその研究を進めていく中での苦悩や葛藤が描かれていて、児童は山中さんの心情を想像しながら話し合い、「今後くじけそうになった自分に」というお題で自分宛ての手紙を書き授業を締めくくりました。

11月から約一か月間開催されていたFIFAワールドカップでは、優勝経験のあるドイツ・スペインの強豪国を破っての16強入りを果たした日本代表の戦いぶりに、日本中が歓喜しました。結果的には目標としていたベスト8にはあと一步届きませんでした。二つの強豪国に逆転勝利しての予選グループ1位通過は、世界中から賞賛されました。予選最終戦は、負ければ予選敗退の窮地だったにも関わらず、選手たちには諦めない気持ちを強くもって戦う姿勢がありました。スペイン戦の後、長友佑都選手がインタビューで、「選手全員がリバウンドメンタリティを發揮して壁を乗り越えた…」と語っていたことから、気持ちの持ち方の大切さや必要性を感じました。

「リバウンドメンタリティ」という言葉は、第5代日本プロサッカーリーグ理事長（Jリーグチェアマン）村井満氏が新人Jリーガー研修の講演で使ったことから話題となったそうです。“プロとしての成功＝（技術力+身体能力）×リバウンドメンタリティ”というのが村井氏の持論です。「プロの世界では年齢経歴は関係ありません。実力主義の世界です。技術力や身体能力が拮抗する中、抜きん出る存在になるために何が必要でしょうか。その重要な要素が『打たれ強さ』とも言い換えられる『リバウンドメンタリティ』なのです。人は必ず壁にぶち当たります。監督の起用法に合わない、ケガに泣くなど、そんなピンチと対峙するとき、『リバウンドメンタリティ』が大きく影響します。」と語っています。

過酷な環境に身を置かれたとき、再起・回復する心の力を、心理学用語では「レジリエンス」と言います。物理学用語としての「resilience」は、「弾力」「弾性」と訳され、「圧力が加わっても基に戻る力」を表します。レジリエンス研究の大家、アル・シーバート（Al Siebert）博士によると、逆境を乗り越える人たちに共通する点は、「どんな辛い経験からも学ぶことができ、自分を成長させてくれると信じられること」「楽観的でありながら悲観的であるといった矛盾する性格を併せもっていること」「自分の置かれた環境に働き掛けて、自分の力で自分の運命を変えられると考えられること」の三つだそうです。

6年生は、くじけそうになった自分宛ての手紙に、憧れの先輩の存在を思い出させるコメントや、困難な状況に苦悩する気持ちに共感するコメント、気合を入れ背中を押す応援のコメントなどを書き記していました。“自分ならできる”と唱え自分の可能性を信じるよう促すコメントもあり、児童に“逞しき”が培われていると感じることのできる時間となりました。

新しい年を迎えました。今年も本校児童に変わらぬ御支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

